

タイ国東北部ソンクラーム川下流域における生態利用の諸相¹

メコン・ウォッチ
木口 由香

ムーン川同様、ソンクラーム川もメコン河の支流であり、タイ東北部ウドンタニ県・サコンナコン県・ノンカイ県を流れてナコンパノム県でメコン河と合流する。合流点付近でソンクラーム川は大きく蛇行している。また、支流がソンクラーム川に合流する地点も多いため、周辺は湿地・湖沼などが多い。湿地が多い地域だが、集落は存在している。これらの村は水田適地の近くや、洪水に遭遇しない高みに作られることが多い。ムーン川中流域と同じく Pa bun-Pa tham と呼ばれる湿地林も広範に見られる。ほとんどの村は農業が主産業であるが、漁撈も行っている。また、採取活動も盛んで、ナコンパノム県シーソンクラーム郡パクヤーム村では、約 50 種の植物が食料や薬草などに利用されている²。

調査地について

今回の調査地ドンサーン村は、稲作を中心とした農業を営む地域である。重要な副業としては、雨期に盛んとなる漁撈が挙げられる。米も野菜も基本的には自給用であるため、現金収入は魚やタケノコの販売に頼っているが、平均すると法定最低賃金以下³の収入、50-100 バーツにしかないとの話であった。子弟の教育費を稼ぐために、出稼ぎにでる村人も多い。

同村はソンクラーム川から約 3 km 離れているが、雨期には周辺の湿地林が蛇行する川の氾濫原となり、村から直接、船で本流まで移動できるようになる。この期間、多くの水田も浸水するため、近年は乾期作に集中して米を作る世帯が増えている。住民は漁撈を稲作に対して「副業」とであると認識しているが、雨期においては多くの世帯で、副業である漁撈の重要度が稲作を上回ると見られる。各世帯には、10 種ほどの漁具があり、船を所有する世帯も多い。

同村でも、ムーン川流域や他の東北タイ地域のように、樹木の若芽や非木材林産物の食料としての利用が盛んである。だが、雨期には湿地林が浸水するため採取が困難となるものも見られるという。(例：Phak Ben, Phak Con, Makhaai など、学名不明)

村は最初の世帯が移住してきてから約 100 年が経っているだろう、という話であった。もともとは湿地林で、周辺の村の放牧地として利用されていたが、集落は無かった。現在、60 歳くらいの女性の話では、子どもの頃、村の周囲は虎の徘徊する地で夜は外に出られず、ときどき家畜の水牛が虎に襲われたという。現在は見られないが、川にはかわうそ、森にはイノシシの類など様々な動物が生息していた。森林伐採や開拓により、それらのほとんどは絶滅した様子である。

最近起こった大きな変化では、10 年ほど前にある企業が湿地林の使用権を買い占め、ユーカリ植林をはじめたことが挙げられる。湿地林は伐採され、村人の放牧地としての利用も禁止されたため、村人は返還運動を起こした。3 年ほど前に村の主張が認められ、企業は撤退している。村人の話では、ユーカリ一種のみの植林は地域の環境に悪影響を与え、

¹ 本稿は、経団連自然保護基金 2000 年度助成プロジェクト「メコン河の魚の生物多様性調査と環境教育 (タイ)」最終報告書を基に作成した。

² Petkam, Sopson. 1997. *The economic and social changes in Pakyam : A fishing village on the Songkhrum River basin* Mahasarakham University, Mahasarakham 参照。

³ 参考値：バンコクで約 160 バーツ/日。調査時点で 1 バーツ約 2.8 円。

湿地林での林産物採取や魚類の産卵も困難になったという。2000年の雨期は降雨量が多く、多くの地域が長い期間水没しユーカリも立ち枯れた。そのため、もともとの湿地の植生がかなり回復してきた、という話もきかれた。だが、湿地林の中にはまだ多くのユーカリの木が残っている。積極的に伐採し自然回復を急がないのか、との問いに対しては「成長したら材として販売するので、村で共同管理をしている」、とのことであった。以下にドンサーン村での生業について記述する。

a) 漁撈

稲作に準じて村人が重視する生業は漁撈である。ソクラーム川の氾濫原という立地から、豊富な魚類資源を雨期の間に大量に得ることができる。一部は Pla Dek⁴として保存される。30年ほど前まで、村で唐辛子すらも作っていなかったという。これは、魚と交換に来る別の集落の人と物々交換していたためである。ドンサーン村ではノンカイ県から来る塩を持って来る人々と、魚や Pla Dek を交換していた。

漁法は様々であり、後述する漁具を用いて季節（水位変化）にあわせて漁撈が行なわれている。一番漁撈が盛んなのは5月ごろ水位が上昇し、川が氾濫期に入る頃と、10月ごろ水が引き始める時期である。回遊する魚類を狙って漁撈が行なわれる。この時期は農業よりも、漁撈に労力が割かれる。5月には現地名で Pla khao thai(?), Pla khum(?), Pla sayeng(?), Pla kot(*Mystus nemurus*), Pla suam(?), Pla khao(?), と呼ばれる魚などが遡上する。この時期の漁獲高は1日10–12kgになる。余剰を市場に出せば、1日100–500バーツの収入となる。しかし魚をとるという行為は基本的に自給のためである。

また乾期には「魚取りはしない」と村人は言うが、時間があると近くの沼や池、川で投網などを打っている。調査時も、川での追い込み漁、池や用水路での投網漁が毎日行なわれている。本流では Pla kot(*Mystus nemurus*) を狙った漁が行なわれている。

b) 農業

稲作

5月から6月に田植えをし、11月ごろ収穫する雨期作と、11月から12月に田植えをし、4月ごろ収穫する乾期作の二期作が行なわれている。雨期作で利用される品種は改良種の KK.6 (モチ米) Khao mali (ウルチ米)、Khao niaw ubon (モチ米) など数種、乾期作は KK.10 (モチ米)、Khao hoom supan (ウルチ米) などが選択されている。二期作が行なわれるようになったのは1970年代後半からで、盛んになったのは、1985年に村の要請により堰が作られ、乾期に利用できる水が手に入ってから以降だという。現在は、全205世帯中137世帯が二期作を行っている。また、同村では乾期作を重視している人が多いという。村がソクラーム川の氾濫原の中にあり、雨期作の洪水リスクが高いからである。実際、2000年もタイ東北部は大洪水で、村の稲作もかなりの被害を受けている。乾期に作付けすれば、洪水の被害を受けずにすむ。一般に、堰は川の流れをせき止め魚の回遊を妨げる大きな要因となるが、この堰は雨期の増水時の水位より低いいため、障害とならないらしい。村人によると堰が出来たことで、漁獲高が減ったということはないという。

放牧

⁴ パデークと呼ばれる魚の発酵食品。主に調味料などとして用いられるが、保存食としても重要である。メコン河流域ではカンボジアまで含む地域に広く見られる。中部タイではプラーラーと呼ばれる。(東北タイでは二重子音のLは発音されないが、表記の統一上、PlaのLを残した)

タイでは年々水牛の数が減っており、保存の必要まで言われているが、東北タイでは家畜として飼育している世帯が少なくない。世帯の労働力の差などでばらつきがあるが、同村でも数頭—10頭、または40—50頭といったまとまった数を飼育している。牛を飼う世帯も多い。湿地林は放牧地として広く利用されている。水牛は調査時点で一頭13,000—14,000バーツで販売できるとの話であった。米など、農産物ではまとまった現金を入手するのが難しい農民にとって、牛や水牛は貯蓄のような意味合いを持っていると言える。飼育には川辺、湿地林など放牧できる場所が不可欠である。

畑作

主に自家消費用として、灌漑田の一部を転用して野菜を作っている。期間は11月から4月ごろまでで、香辛料の唐辛子、香菜、野菜のPhak Kaad（小松菜に類似）などを栽培する。

c) 採取

概観

ソクラーム川周辺に広がる湿地林は、村の共有林として採取などに広く利用されている。湿地林利用形は、食料の採取と薪や道具を作る素材を得るといったことが主である。また、水牛や牛の放牧地としても利用されている。農閑期にはKin khao paa（森で食事）と称して、家族や友人と共に食料採取とピクニックをかねた形で森に入る。森といっても、湿地林は疎林であり、竹などが多く生えている。また、雨期に水没している土地も、乾期には車が通行できて移動は簡単である。漁撈や貝採取など主要な「獲物」はあるが、他にも食用にできるものは何でも採取する。一通り作業が終わると、主食のもち米と共に採取した副菜で食事をする。

湿地林での食料採取

主要なものはタケノコの採取である。2—3月にはNo-mai Kasa（直径2センチほどにしかない細い竹の芽。学名不明）を採取して食用としていた。竹には数種類あり、タケノコが主たる副菜となるのは雨期が中心である。余分は販売され、現金に換えられる。雨期で重要な食料となるものは野生のキノコ類である。現地名でHed khaaw, Hed phung, Hed tham, Hed phung luang, Hed phung thaam, Hed klua（学名は不明）などが上げられた。また、木の若芽も様々なものが食用となっている。インタビューで上がったものは、Phak kradon(*Careya sphaerica*), Phak ben(?), Phak seang (*Xanthophyllum glaucum*), Phak tiw (*Cratoxylum formosum*)などが通年で採取でき、雨期と寒期（乾期に入っているが気温も下がる12月から1月ごろ）にはPhak hai kai (?), Phak kii som (?), Phak khii khom (?) などがあるという。雨期の食料の一部は湿地林が増水で水没している間は入手できない。乾期に盛んに利用されるものに、Khai Mot deang（赤蟻の卵：*Oecophylla smaragdina* つむぎ蟻の蛹）⁵がある。正確には卵ではなく蟻のさなぎなのであるが、東北タイではこれを炒めて食べる、スープにいれて調味料として利用するといったことが広く行なわれている。かなりの量がローカル・マーケットにも出回っており、莫大な量が採取されていると思われるが、繁殖力が強いようで減ったという話は聞かない。逆に人間が採取しなければ、異常繁殖するかもしれない。人間も天敵として組み込まれバランスが取れているようで興味深い。

道具類の素材採取

自生する蔓性のKhua yaa naang (*Tiliacora triandra*) の蔓は、竹製の漁具を編む際、竹をまとめるのに利用される。また、その葉はKeang no mai（タケノコ・スープ）の食

⁵ 藤田渡、「食物をめぐる人と自然の関わり」記載の学名を参照。

用である。漁具に利用する竹は家の近くに移植したものを主に利用するが、一部は湿地林に生育するものを使う。

湿地や運河・河川など水辺の利用

同村周辺は、蛇行して流れるソクラーム川の流域であり、湿地、沼、農業用運河、といった水の豊富な場所である。河川や運河、沼では現地名で **Hoi cuup**(?、たにしに似る)、**Hoi kap kii**(?) といった貝類が採取されている。川底の貝を浚うために、**Khraat** といった道具を使用する。3月には沼で **Meang tap tao** (*Cybister Limbatus*?, 黒色の水生昆虫) の採取が盛んであった。東北タイでは前述のつむぎ蟻のように、昆虫も好んで食用とされている。トンボの幼虫であるヤゴも料理の素材として用いられているケースも報告されている⁶。

農閑期には、**Phuu** (学名不明) と呼ばれる湿地に生える草から **Saat**(ゴザ)を作る作業が盛んに行なわれていた。まず、**Phuu** を刈り取り、一本の茎を3-4本に裂き3日ほど干す。その後、経糸を張った **Kiid tham saat** (ゴザ織り機) にかけて手作業で織っていく。ほとんどが自家用で、一年使用する分を作りおきするという。

参考文献

- Baird, G. Ian. 1999. *The fishes of Southern Lao* Ministry of Agriculture and Forestry, Lao P.D.R. (in Lao)
- Chuweaw, Sansani. 1999. *Khwaam samkhan khong shapphayakon pramong to setthakid sangkhom phun ban nai lum mae nam Songkhram* (in Thai).
- Khonkean University. 1996. *Gan sukxa lae cat tham phean ponkan kaekhai phonkrathop sinwaetlom cak kan kep kak nam nai tua lamnam khongkan nam Songkhram* Khonkean Univeisity (in Thai).
- Petkam, Sopson. 1997. *The economic and social changes in Pakyam : A fishing village on the Songkhram River basin* Mahasarakham University, Mahasarakham (in Thai).
- Rainboth, J. Walter. 1996. *Fishes of the Cambodian Mekong*, FAO
- Sathaban kan pheat phean Thai krom kan phaet krasuang satharanasuk. 1998. *Phak phun ban : Phak Isan* (in Thai).
- Sathaban kan pheat phean Thai krom kan phaet krasuang satharanasuk. 1999. *Malaeng : Ahaan manut nai anaakhot* (in Thai).
- Wanliphodom, Srisak. 1998. *Watthanatham Pla dek Samnakgan samansukxa canwat Sakonnakhon* (in Thai).
- Worangrat, Surat. 1997. *Khongkan sukxa rabopniwaet lamnam Songkhram Samnak nayobai lae phean singwaetlom* (in Thai).
- 藤田 渡『食物をめぐる人と自然の関わり—東北タイでの事例から—』東南アジア研究 37 巻 4 号 2000.

⁶ 藤田渡、「食物をめぐる人と自然の関わり」